

(参考資料)

岡山市埋蔵文化財センター年報 22

2021（令和3）年度

2023年3月

岡山市教育委員会

史跡 万富東大寺瓦窯跡

所在地 岡山市東区瀬戸町万富
調査原因 市内重要遺跡範囲等確認調査
時代 鎌倉時代

調査期間 210510～210726
調査面積 90㎡
担当者 原田悠希・辛川あかり

遺跡の概要

万富東大寺瓦窯跡は源平合戦の折に焼失した東大寺を再興する際に使用した瓦を焼成した窯である。国の史跡に指定されており、過去に岡山県教育委員会や瀬戸町教育委員会により調査が行われている。

岡山市教育委員会では令和3年度より万富東大寺瓦窯跡の保存整備事業として範囲確認調査を実施した。

調査の概要

令和3年度は大寺山地区の南側、過去に岡山県教育委員会が調査した3・10号窯と科学探査でその存在が推定されている4～9号窯の残存状況やその構造を調べることを目的に調査区(トレンチ1)を設定した。また、岡山県教育委員会が行った調査のトレンチ等に正確な位置情報を付与する事にもつとめた。調査は窯体の上面検出を目的とし、必要な箇所には斜面部と煙出し方向にトレンチを拡張した。

トレンチ1

トレンチ1では、調査の結果、9基の瓦窯を検出した。各窯の位置については過去の磁気探査で推定された位置とほぼ合致する。ただし、6号窯と7号窯との間から未確認の瓦窯が1基みついている。斜面部の精査では各窯の断面部分を確認した。瓦窯は基本的に有牀式平窯と考えられ、焚口・燃烧室・焼成室で構成される。焼成室には分焰牀があり、今回確認できたものは基本的に2条で構成される。瓦窯は現況の斜面に対しほぼ直交し、1～2m程度の間隔をあけて南北方向に並列して築かれている。

3号窯は過去に岡山県教育委員会によって発掘調査が行われている。令和3年度の調査では北半分を再確認した。残存長3.7m、最大幅1.4m、残存高1.0m程となる。焼成室と燃烧室を分ける隔壁が確認でき、焼成室長は約2.7mとなる。窯体や分焰牀は粘土と瓦を用いて構築されており、斜面での観察では窯体の一部で石組みを確認した。3号窯の北側には窯体に並行する窯壁が確認できた。3号窯は幅2m近い窯を最初に築き、その後規模を縮小させて瓦を焼成していたと考えられる。

4～6号窯は幅1.4m前後であり、焼成室のみ確認できた。分焰牀は2条で構成されている。粘土と平瓦を用いて築かれていた。

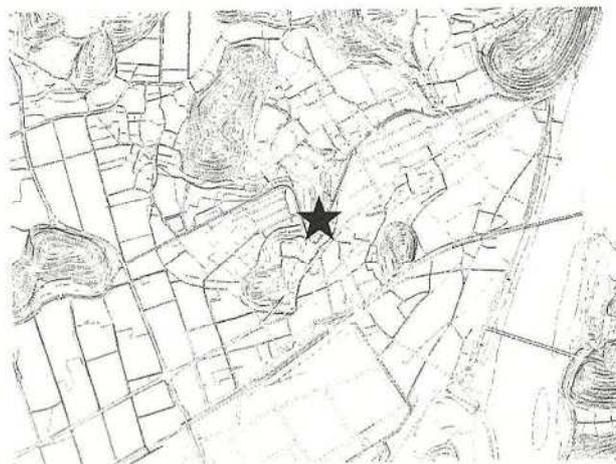


図1 万富東大寺瓦窯跡の位置 (1:25,000)



図2 3号窯 (北東から)

6号窯と7号窯の間では、科学探査で推定されていなかった瓦窯が確認できた。残存長4.1m、最大幅1.3mとなる。隔壁や分焰牀は確認できていないため、構造については不明な点も多い。

7号窯では燃焼室と焼成室を確認した。残存長4.4m、最大幅1.3mである。隔壁付近が斜面下側に崩落しており、正確な形は復元できない。隔壁は粘土と平瓦を用いた2条の柱（空気の通り道は3つとなる）で仕切られている。分焰牀は2条確認できた。

8・9号窯はそれぞれ残存長3.8m、4.9m、最大幅1.3mの瓦窯である。明確な隔壁や分焰牀は確認できなかった。9号窯は2回分の床面を確認できた。

10号窯は岡山県教育委員会によって焼成室が確認されている。今年度の調査では、焚口から焼成室までを確認できた。今年度、確認できた中では最も残存状況がよい。残存長約5.8m、最大幅1.6m、残存高約1.0mとなる。隔壁は確認できたが、分焰牀は確認できなかった。隔壁は窯体に直交し、その上面には平瓦の痕跡が確認できた。隔壁の幅は平瓦の小口面の幅と同程度である。焼成室は長さ約2.6m、最大幅1.3mである。燃焼室は中ほどで幅1.6m程度まで膨らんだ後、焚口に向かうにつれて狭くなる。長さ約2.0mか。焚口は粘土、石材、瓦を用いて築かれている。ハの字状に広がっていくことも確認できた。天井部分は失われていたため、本来の高さはわからなかった。10号窯周辺には瓦や炭、灰が大量に堆積しており、9号窯との間に明確な境目が存在する。この土層は南側から10号窯に向かって下降していく様子が観察され、その下部には地山が確認できた。10号窯を築く際に造成が行われたことは推定できるが、本来の地形が谷状であるかについては判断できなかった。

10号窯の北側には瓦を列状に並べている遺構が確認できた。瓦は東西方向に延びる。瓦窯に伴う排水施設なのか近代のものは判断できなかった。

遺物は各地点から瓦が出土している。基本的には埋土や流土からの出土のため、確実に瓦窯に伴うものはない。出土した瓦の多くは平瓦であり、丸瓦、軒平瓦、軒丸瓦は総数の10%に満たない。また、中世の土師質土器や瓦質土器、石硯なども流土内から出土している。



図3 6～7号窯（南西から）

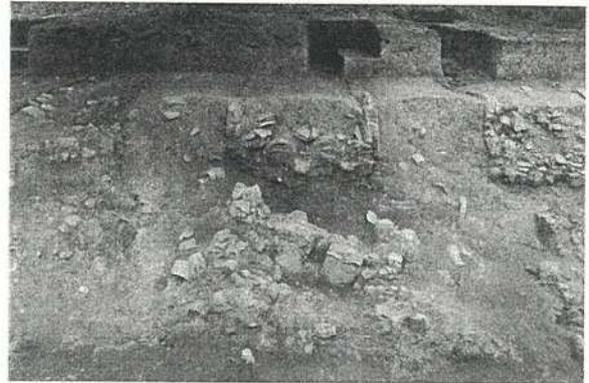


図4 7号窯（西から）

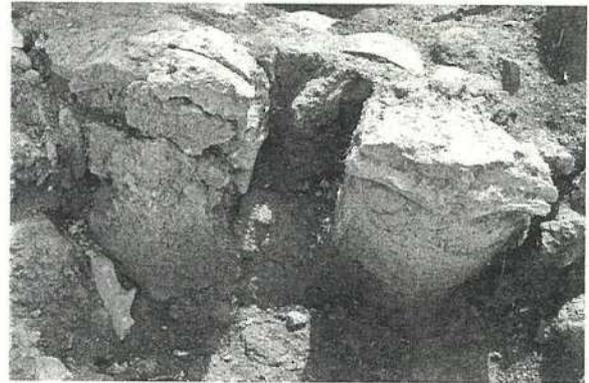


図5 7号窯隔壁（西から）



図6 10号窯（北東から）

今年度の調査により、当初の目的であった過去の調査場所の正確な位置を付与することができた。また、科学探査で推定されていた瓦窯の状況を確認でき、新たにもう1基確認することができた。瓦窯は数mおきに築かれ、大量に生産されていた様子が容易に想像できる結果となった。また、10号窯の様子からは、今後の復元を考えるうえで重要な資料となるだろう。今後も瓦窯やその付属施設の分布や構造等、万富東大寺瓦窯跡を整備する上で必要となる記録の蓄積、資料化につとめていきたい。

(原田 悠希)

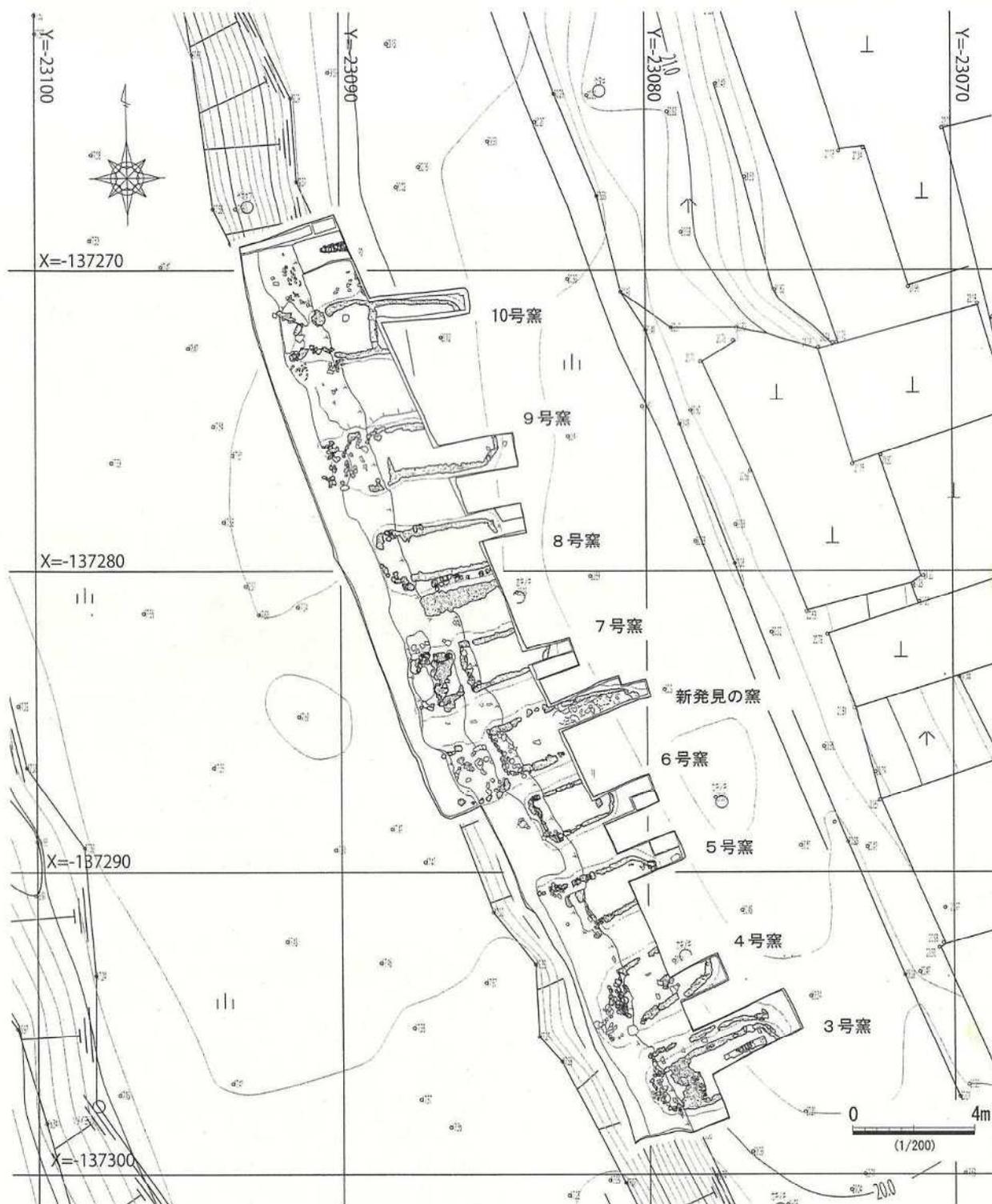


図7 令和3年度調査区平面図 (S=1/200)

岡山市埋蔵文化財センター年報 23

2022（令和4）年度

2024年3月

岡山市教育委員会

史跡 万富東大寺瓦窯跡

所在地	岡山市東区瀬戸町万富	調査期間	220602 ～ 220818
調査原因	市内重要遺跡範囲等確認調査	調査面積	131 m ²
時代	鎌倉時代	担当者	原田悠希・辛川あかり・下祐一朗

遺跡の概要

万富東大寺瓦窯跡は源平合戦の折に焼失した東大寺を再興する際に使用した瓦を焼成した窯である。国の史跡に指定されており、過去に岡山県教育委員会や瀬戸町教育委員会により調査が行われている。

岡山市教育委員会では令和3年度より万富東大寺瓦窯跡の保存整備事業として範囲確認調査を実施している。令和4年度は、過去に岡山県教育委員会によって調査が行われた大寺山地区の南側を中心に調査を行った。

調査の概要

今回の調査は、過去に岡山県教育委員会が調査したT11～13号窯の範囲と構造、その残存状況を調べることを目的にT2を、堅穴遺構と灰原の範囲の確認を目的にT3を設定した。また、灰原と地形の確認を目的にT4、5、6を設定した。調査は窯体、堅穴遺構の上面検出を目的とし、必要に応じて調査区を拡張した。

T2

11～13号窯の3基の瓦窯を検出した。

11号窯は残存長3.5m、最大幅1.6mの有床式平窯である。焼成部は2条の分焰牀をもつ。窯体、分焰牀は粘土と平瓦を用いて構築しており、分焰牀と南側壁の間には平瓦を架構していた。

12号窯は残存長4.8m、最大幅1.6mの有床式平窯と考えられる。分焰牀については確認できていないが、これまでの調査成果から2条と想定される。焼成部は2.7m。焼成部と燃焼部を分ける隔壁が確認できた。燃焼部と焚口を分ける部分が判然としないため、それぞれの規模は不明であるが、焚口付近まで残存していると思われる。

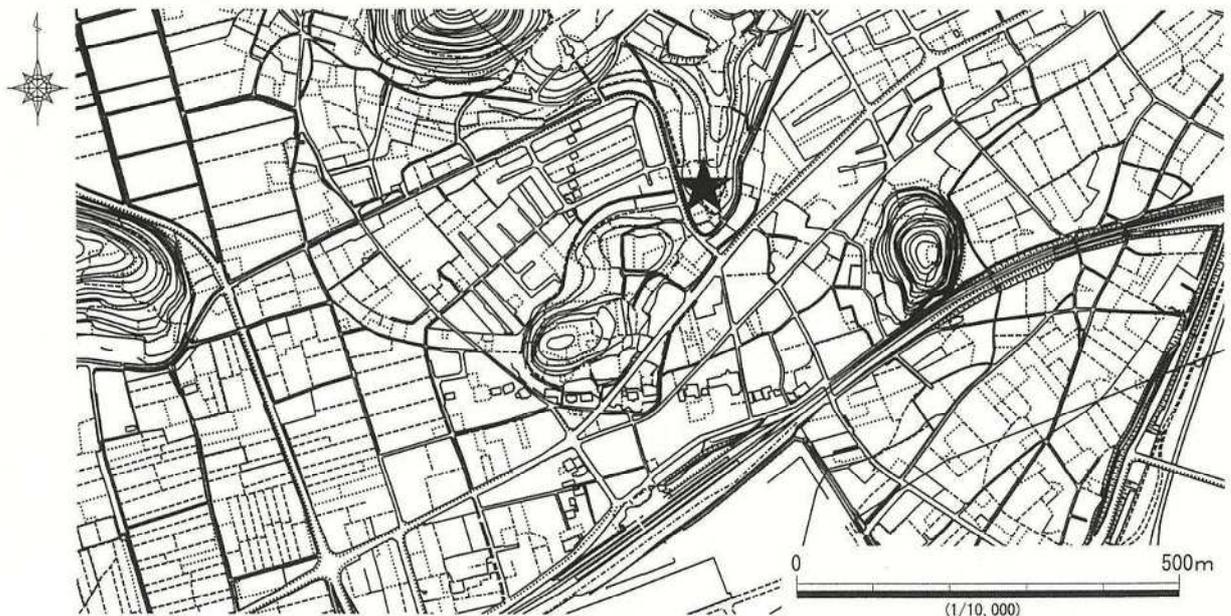


図1 遺跡の位置 (1:10,000)

13号窯は残存長6.5m、最大幅2.8mの有床式平窯である。分焰牀は3条以上と考えられる。焼成部の窯内では南側壁寄りには埴を立てかけており、埴の接地面は分焰牀の上部とほぼ一致する。南側壁の窯体はトレンチの西側で内側へ曲がる。周囲の地形もこの変換点付近で下がり始めるため全体的に構造上の変化があると考えられる。ただし、隔壁は未確認である。焼成部の後部はほぼ直角に曲がり、閉じる。その外側には煙出しと考えられる構造が中軸線上に確認できた。粘土と瓦を用いて構築しており、現況で2箇所空間が認められる。本来は3箇所の空間が存在したと思われる。13号窯はこれまでの調査で確認できた窯と明らかに規模や構造が異なっており、重源とともに来た大和の瓦工による可能性も考えられる。

13号窯の北側では、柱穴を確認した。

T 3

堅穴遺構の範囲の確認を主に行った。T 3内には近代の耕作に伴う多くの攪乱が認められた。堅穴遺構については、T 3-2、T 3-3を設定し、西側への広がりを確認したが続きは認められなかった。堅穴遺構を切る、近代の暗渠部分で壁面を確認したところ、地点により堅穴遺構の底面にはばらつきがあり、暗渠内で底面が上がるなどしていた。堅穴遺構に広がる黒色土内には多くの瓦とともに、焼けていない粘土が多くみられた。これらの点から、これまで堅穴遺構と考えられていた部分は重なり合う粘土採掘場と灰原を複合的に検出している可能性が出てきた。T 3の北側には灰原が広がっており、瓦片や焼けた粘土塊などが確認できた。灰原自体はT 3より北側に広がると考えられる。T 3-4は灰原の広がりを確認するために設定し、全体的に灰原が残存していた。

T 4

灰原の範囲と地形の確認を行ったが、灰原は確認できなかった。耕作土直下で地山のブロックが混じる層が確認でき、その下部に地山を確認した。後世の攪乱により、当時の遺構面は失われていると考えられる。

T 5

トレンチ内の南半分では灰原を確認したが、厚さ10cmにも満たない状況であり、地山が所々で確認できる。後世の削平により、残存状況は悪い。北半分では、灰原は確認できず、近代の耕作に伴う暗渠を確認した。

T 6

T 3で確認された黒色土層の範囲と、大寺山地区に南側に存在する段差の状況の確認を行ったが、黒色土は確認できなかった。耕作土下には地山が確認できる。段差の下部には地山を掘りこむ形で東西方向の溝が確認できたが、時期は判然としない。



図2 11号窯全体



図3 12号窯全体



図4 13号窯全体

今年度の調査により、当初の目的であった11～13号窯の範囲を特定することができ、一部では構造も把握することができた。特に13号窯は史跡内でも異例の形態・規模であり今後、より詳細な調査が必要であると思われる。また、堅穴遺構についても、粘土採掘坑の可能性が指摘されるなど、史跡復元に向けて新しい情報を得ることもできた。ただし、灰原の範囲については窯に近い場所でも削平により失われているなど、課題として残された。今後は同時期の瓦窯との比較や出土品の整理を行いながら、調査を進めていきたい。

(下 祐一朗)



図5 T3-1 灰原

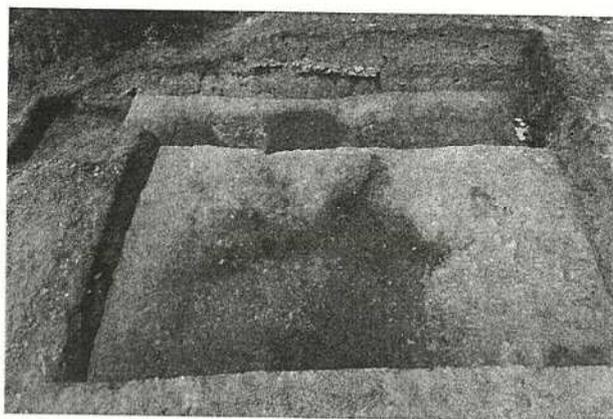


図6 T3-3 全体

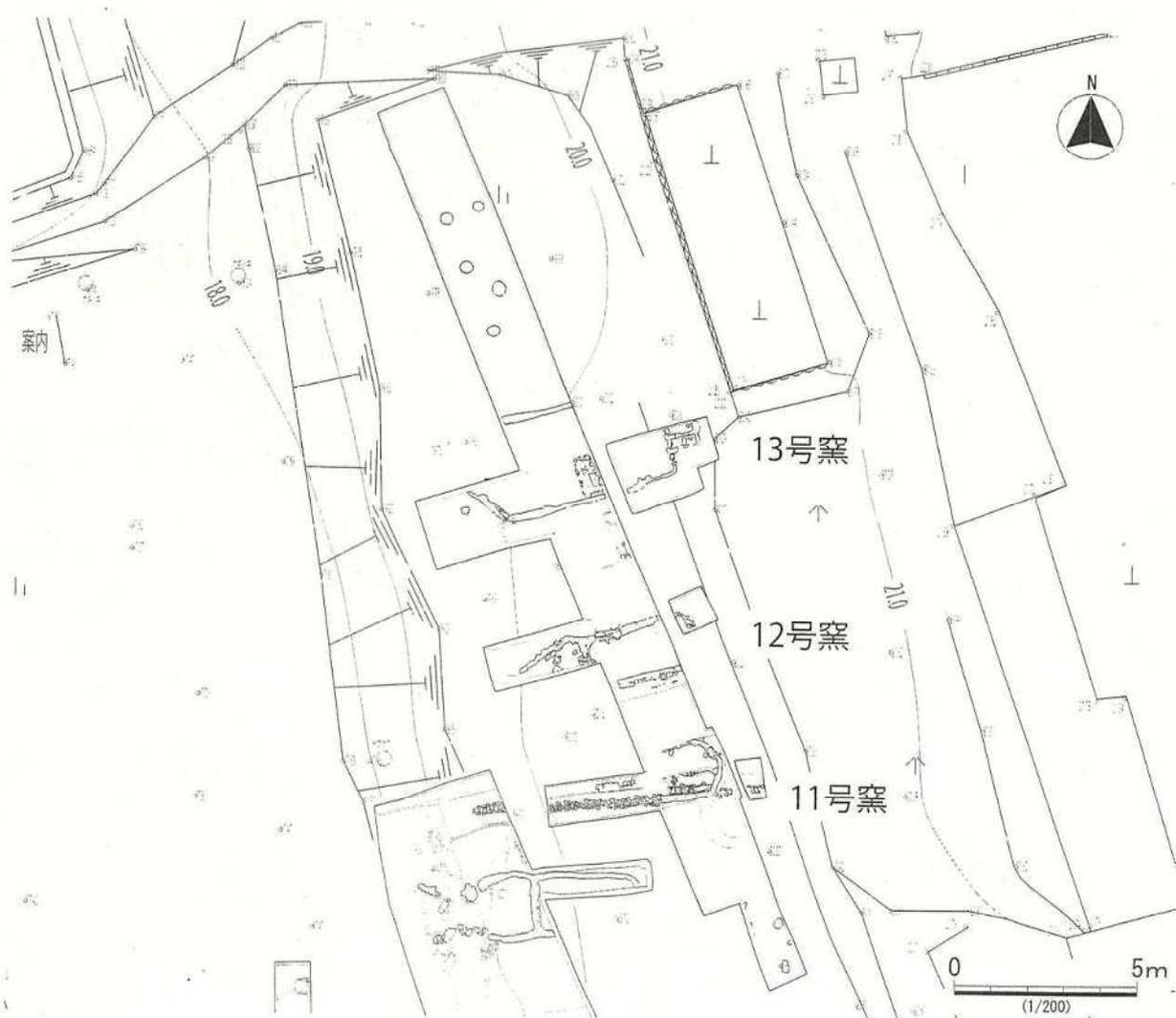


図7 T2 平面図

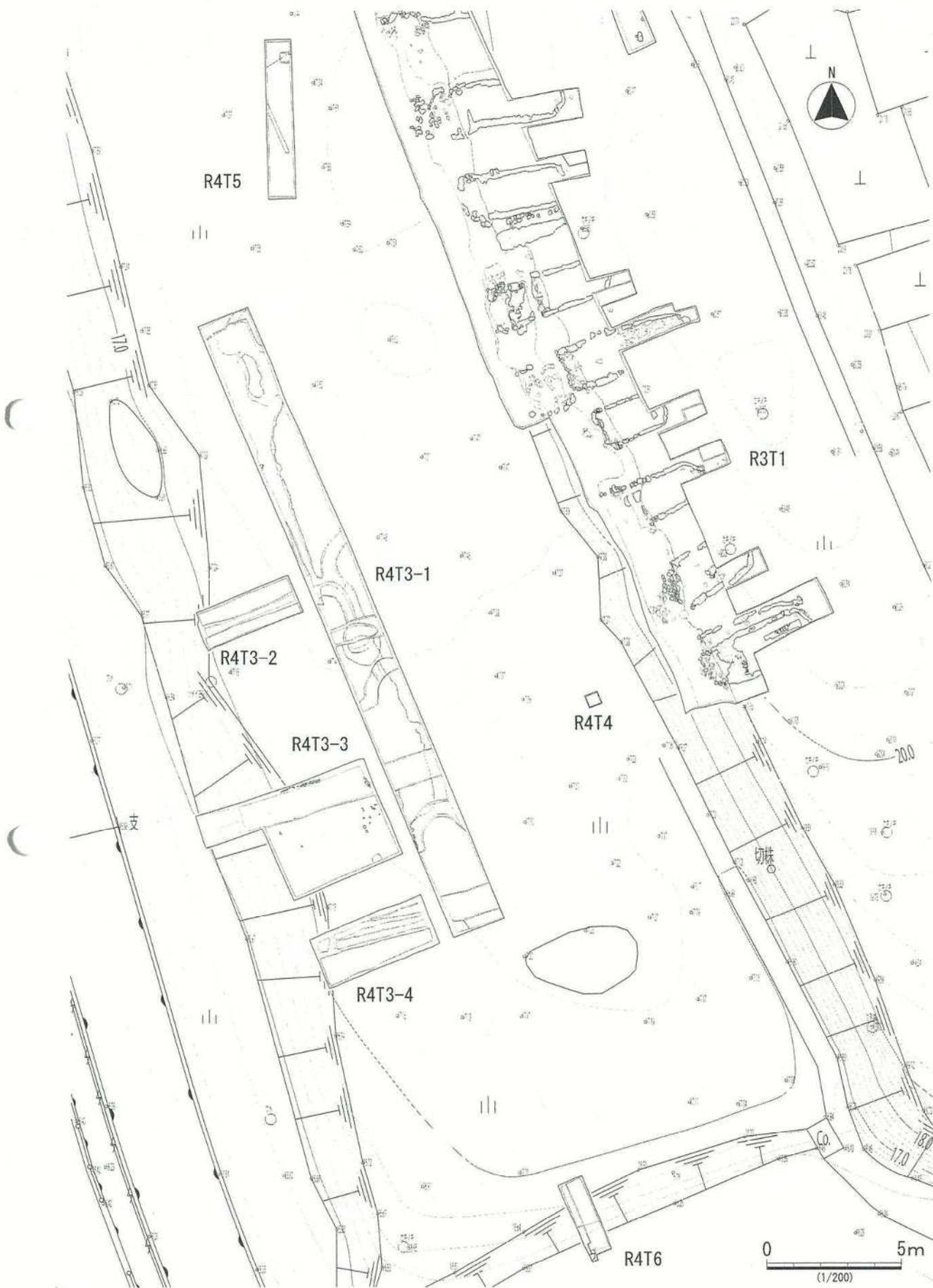


图8 T3~6 平面图



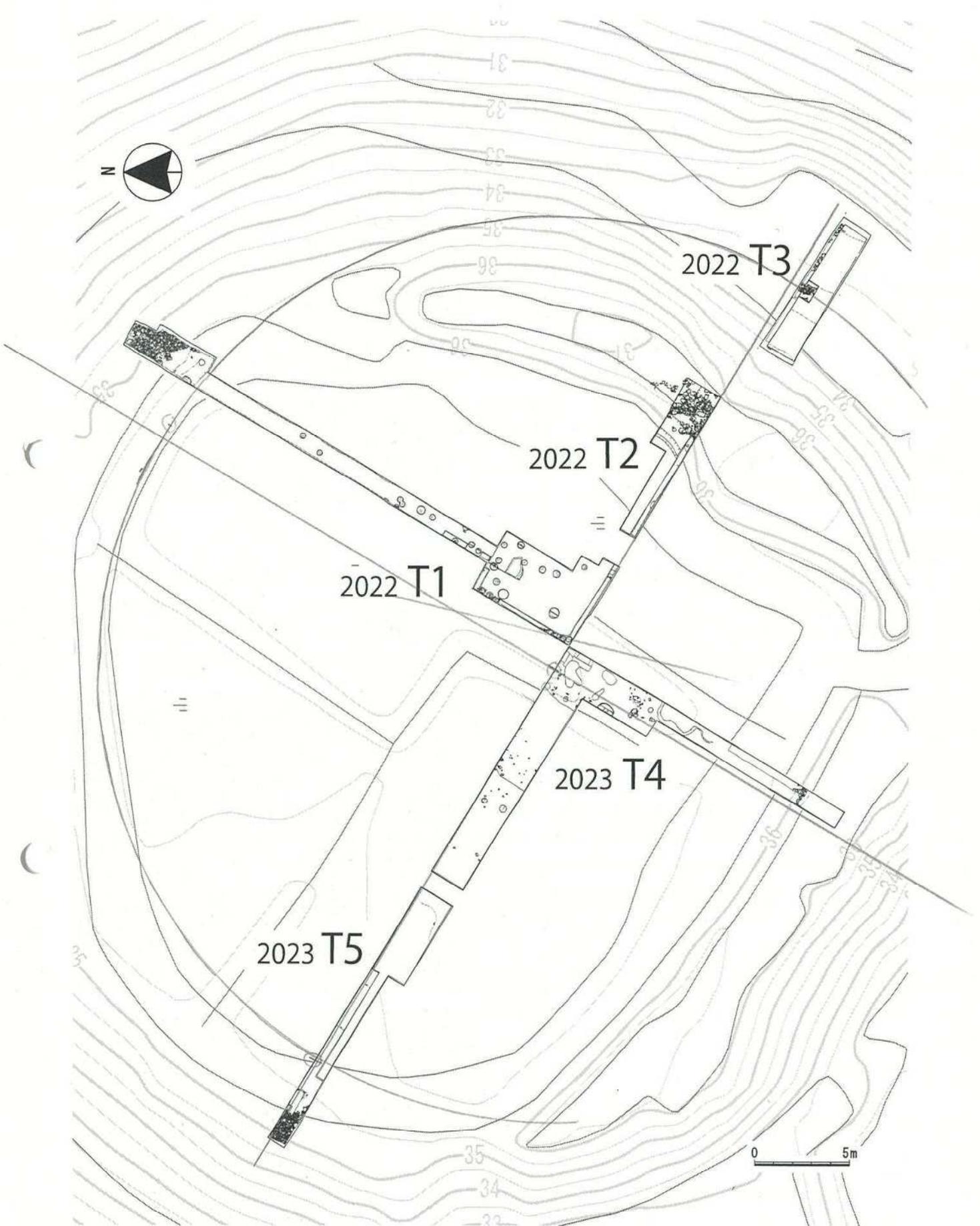


図7 トレンチ配置図

史跡 万富東大寺瓦窯跡

所在地 岡山市東区万富
調査原因 市内重要遺跡範囲等確認調査
時代 鎌倉時代

調査期間 240117～240319
調査面積 60 m²
担当者 辛川あかり・下祐一朗・須藤寛史

遺跡の概要

万富東大寺瓦窯跡は、源平合戦の折に焼失した東大寺を再興する際に使用した瓦を焼成した窯である。国の史跡に指定されており、過去に岡山県教育委員会や瀬戸町教育委員会により調査が行われている。

岡山市教育委員会では、令和3年度より万富東大寺瓦窯の保存整備事業として範囲確認を実施している。令和5年度は、大寺山地区の北側の調査を行った。



図1 調査地点の位置 (1/10,000)

調査の概要

今回の調査では、過去に瀬戸町教育委員会が調査した瓦窯と瓦たまりの残存状況や構造を調べることと正確な位置情報を付与することを目的にトレンチ7を、未調査である大寺山地区の斜面部北側端の遺構確認や周辺地形の確認を行うためにトレンチ8を、瀬戸町調査時の05 トレンチで検出された灰原に伴う窯体の位置を探るためにトレンチ9を設定した。

トレンチ7

瀬戸町の調査により瓦窯(S0-1)と瓦たまり(SK-1, SK-2)が確認されている。基本的には当時の発掘停止面まで掘り下げ、遺構が確認された付近では、調査可能な範囲まで調査区を拡張した。窯S0-1は最大残存長1.8m、最大幅1.5mの窯であり、焚口付近の床面を再検出した。床面は焚口側から1.2m付近まではほぼ平坦だが、1.3m付近からは焼成室側へ向かって上がっている。平成7年の墓地造成の際に窯S0-1のすぐ東側で発焰牀がみつかり、状況的に窯S0-1は3～12号窯と同規模の有牀式平窯であると考えられる。また、窯の南北両脇に柱穴を検出した。瓦たまりには多くの瓦片と石材、焼土が含まれていた。



図2 トレンチ7 S0-1・瓦たまり

トレンチ8

窯や柱穴などの遺構は検出できなかった。表土直下に黄褐色土が堆積しており、黄褐色土の下に明黄褐色の地山を確認した。地山は、斜面の下端部で急激に傾斜が急となるが、人為的な削平によるものではなく、自然地形の傾斜として認識できた。



図3 トレンチ8 全体(西から)

トレンチ9

灰原と瓦列を検出した。灰原は、トレンチ内東側から西に向かって「ハ」の字形に広がりながら堆積している。この灰原と瀬戸町の調査時に検出された灰原(05トレンチ)は、堆積状況などから同一のものと考えられる。灰原内からは「東大寺」の刻印をもつ破片や軒丸瓦を含む東大寺瓦片が多数出土した。灰原の「ハ」の字状の先端部分は僅かに掘り込まれており、焚口付近と思われたため、窯本体を求めてトレンチを東へ拡張した。拡張区西側では東大寺瓦片を用いた瓦列を検出したが、拡張区東側には地山が広がっており、窯本体は確認できなかった。瓦列は瀬戸町の調査(03、04トレンチ)や10号窯・11号窯付近のものに酷似しており、後世の耕地整備の際に埋め込まれた暗渠であると考えられる。大寺山地区の北半は斜面が階段状に削平されたため、窯は残存していない可能性が高い。また、灰原層の上には橙色に焼けた粘土塊や東大寺瓦を多量に含む濃さが薄い炭混じりの層があり、白灰色に焼き締まった塊も出土した。この層は、トレンチ7の瓦窯S0-1に伴う灰原の層である可能性も考えられる。

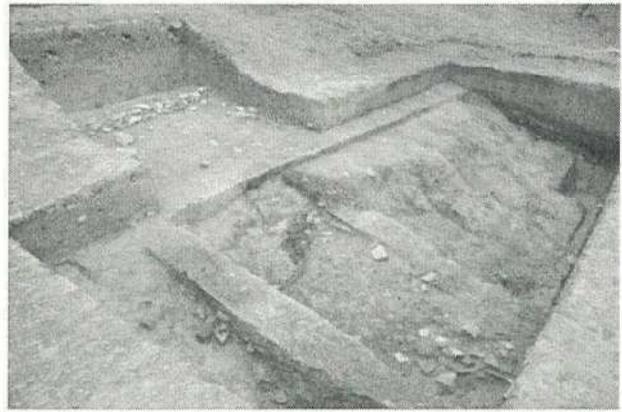


図4 トレンチ9 全体(北西から)

まとめ

今回の調査では、指定地内の斜面部北端には遺構が存在しないことが明らかになり、遺構分布範囲についての新しい情報を得ることができた。また、岡山市教育委員会の調査としては始めて明確に灰原を検出し、土層堆積状況から、大寺山地区北側の瓦窯跡が後世の土地改変の影響をどのように受けたのかをある程度おさえることができた。ただし、明確に焚き口から続く灰原の検出には至らず、窯と灰原のセット関係については課題として残された。今後は灰原出土品について整理し、遺物からみた場合の遺構の変遷を考える上での検討材料にしたい。

(辛川あかり)

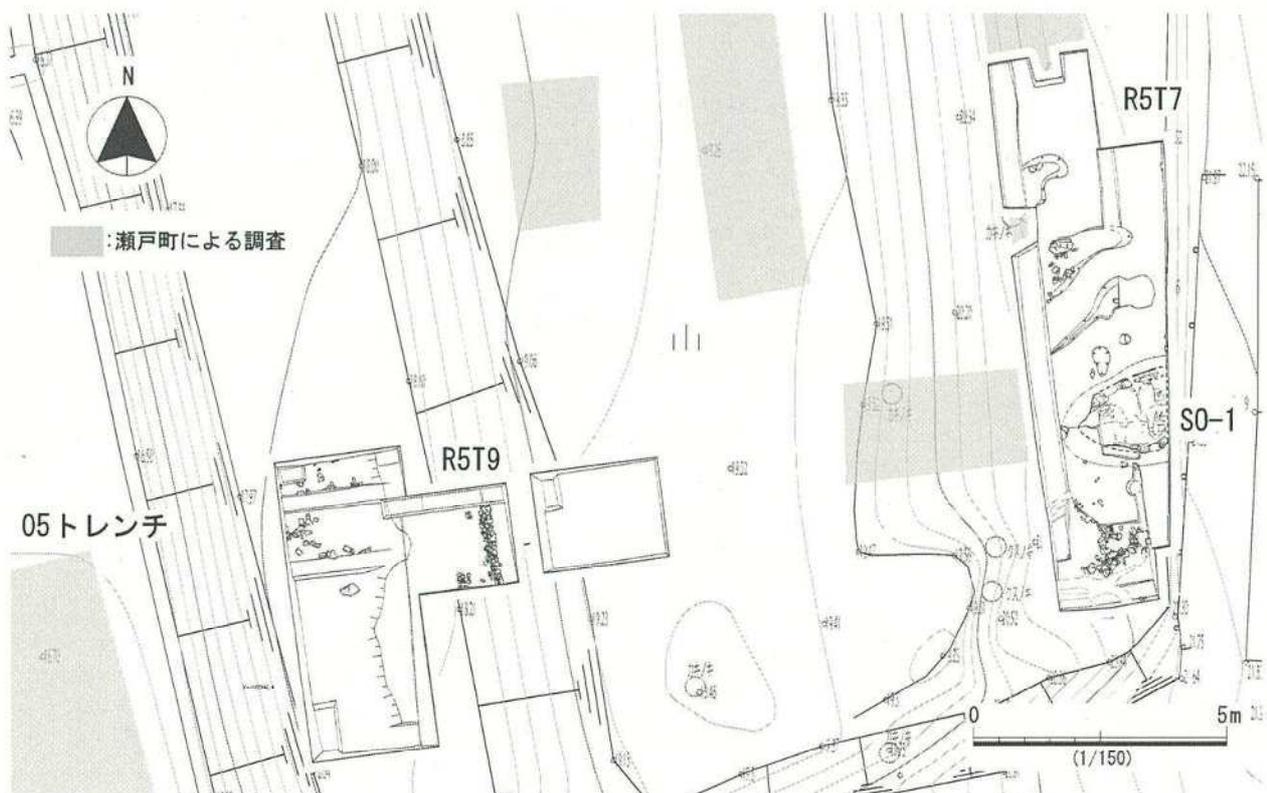


図5 トレンチ7、トレンチ9 平面図(1/150)

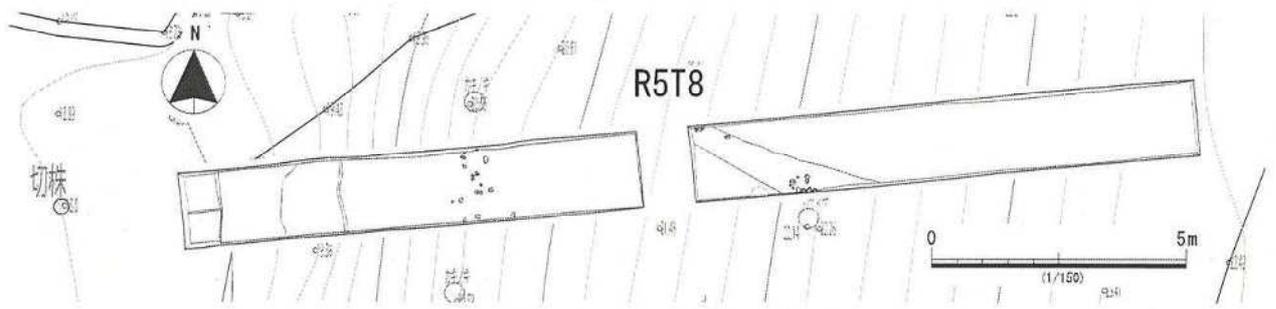


図6 トレンチ8 平面図 (1/150)

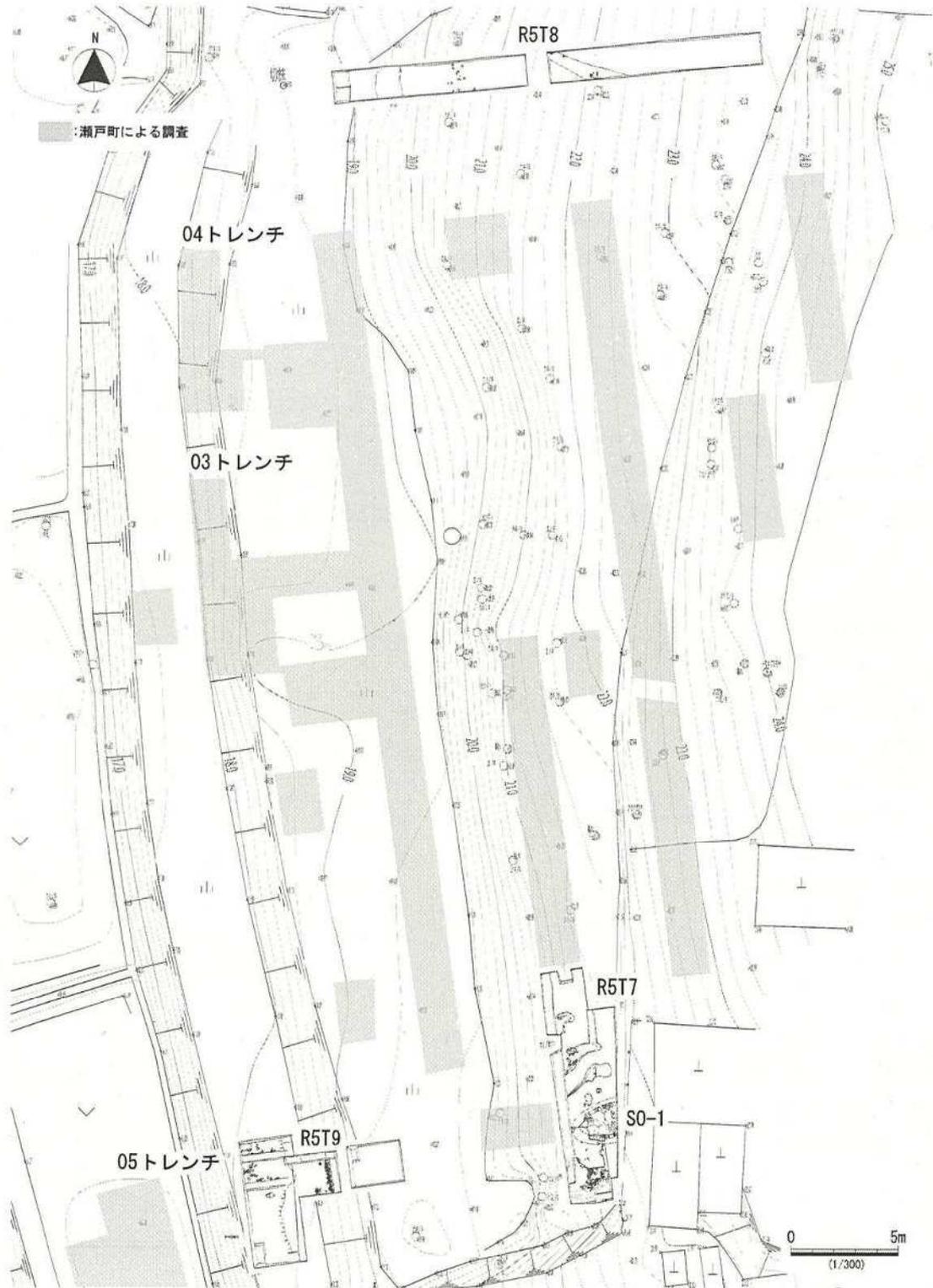


図7 トレンチ配置図 (1/300)